

茨城県スクールカウンセラー 落合幸子

子どもの洋服は自分で選ばせる

子どもが家に寄り付かない

ある小学校に行った時、女の先生が、「大学生になった娘が家に寄り付かない」と、廊下で急に話しかけてきました。「盆と正月と墓参りとGWなど、年5回ぐらいしか帰らない。それも家に寄らずに帰ることがある」ということでした。私は「年5回も帰ってくるのだから、偉いじゃない」と言いながら、自分の経験を話しました。

子どもというのは、家を離れてからも、無性に親に会いたいと思うことがあります。今、コロナで親に会えないで、さみしい思いをしている方も、大勢いらっしゃると思います。私も、時々会いたくなって、つくばから埼玉県の川越にある実家に帰りました。その道すがら、「母親に会いたい」という思いと、「また傷つけられる」という思いが交差し、「行くか、帰るか」ずっと考えながら運転していました。先が予測できるからです。

玄関に入った時の母親の第一声は、「何、そのスカート」「何、その恰好」というものでした。「その声を聞いた途端、家にも入らずに、三時間かかる道を帰った」と話しました。すると、その先生は、自分もまったく同じだということです。子どもが久しぶりに帰ってくると、「何、その洋服」とか、「何、その髪の毛」とか、言ってしまうということです。

もう一つは、知らず知らずのうちに子どもを傷つけていることに、母親自身は気づいていないということをお話しました。私が初めて出版した本を親に見せに実家に帰った時のことです。母親に本を手渡すと、一言「何、こんなもの」と、畳の上に置きました。後に、私が「子どもをほめて」と言うと、母親は「親が子どもをほめるの？」と、驚き、真顔で聞き返してきました。その時はじめて、母親は、「子どもをほめるべきではない」という信念を持っていたことがわかったのです。その話をすると、その先生は、「自分もまったく同じだ。子どもをほめるなんて考えられない。自分は古いのだと思う」といいました。

あまりにも話が一致して、母親とその先生との共通点に、こちらが驚いてしまいました。

私が親に「ほめて」と求めたのは、何と50歳近くになった頃です。小学生や中学生の頃ではありません。そんな年齢になっても、子は親にほめてもらいたいと思って生きているのです。

残念なことに、とうとう一生ほめてもらえませんでした。私の心残りの一つです。

子どもの洋服や髪形に口を出すというのは、自分の思い通りに子どもを支配したいという欲求の表れの一つです。私がスクールカウンセラーとして初めて出合ったのは、不登校の女子中学生でした。彼女が言った、「冷蔵庫には紫色にカビの生えた食べ物しかない」「自分がどんな色が好きなのか、何が似合うかわからない」という言葉は、当時の私にとって衝撃でした。

親に支配され、親の言うとおりにしていると、いつの間にか、自分は何色が好きなのか、何が似合うのかわからなくなる。それどころか、何が食べたいのか、何をしたいのか、何を求めているのか、どう生きたいのか、そういうことがわからなくなってしまうのです。洋服の問題は表面的な問題ではなく、自分の存在に対する確信の問題でもあるのです。「あなたの身体に触れていいのは、あなたが選んだものだけ」(千速茜『クローゼット』新潮社)は、生きていく上の基本です。

ある男性教師が、自分の服は妻が選んでいると言いました。言われてみると、夫の洋服は私が選んでいます。